

3. 妻木晩田遺跡出土の破鏡について

はじめに

妻木晩田遺跡からは、これまでの調査で3点の青銅鏡が出土している。いずれも竪穴住居跡からの出土であり、うち2点は破断面が研磨されたいわゆる「破鏡」である。

これらの青銅鏡は、鏡を所有した階層の性格や、他地域との交流を考えるうえで重要な手がかりとなる。特に松尾頭地区出土の破鏡は、大型庇付掘立柱建物跡に近接する大型竪穴住居跡から出土したことから、同地区を「首長の居住区」（高尾・馬路編 2003）と評価する根拠のひとつとなっている。このように重要な資料でありながら、これらの鏡についてはこれまで十分な検討がなされていない。

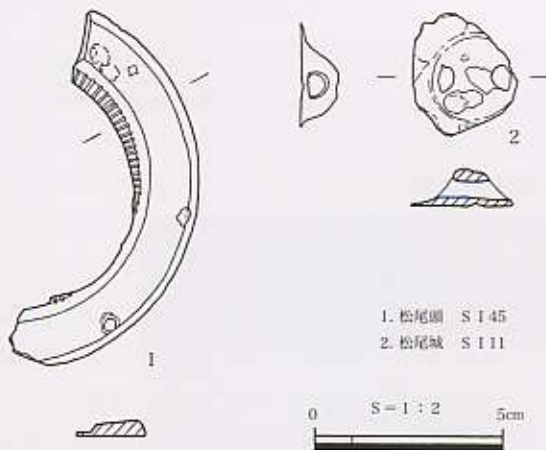
そこで本稿では、まず妻木晩田遺跡出土の鏡について情報を整理する。次いで中四国地方出土の破鏡を通覧し、その様相の中に妻木晩田遺跡出土例を位置づけることによって、これらの破鏡のもつ歴史的な性格を明らかにすることを目的とする。

なお、本稿における中国鏡の編年は岡村秀典の編年（岡村 1984、1993、1999）に拠ることとする。

1. 妻木晩田遺跡出土の青銅鏡

(1) 松尾頭地区 第45 竪穴住居跡 (SI45) 出土外区片

全周の約1/3の外区破片であり、わずかに内区外周の櫛歯文帯が残存している。外区は上面がやや内傾する素文平縁で、外区と内区とは明瞭な段差をもつ。櫛歯文は傾斜せず直であり、1cmあたり約5本とやや粗い。内区側および外区の一方の端部（第1図の上側）の破断面が研磨されている。穿孔はなされていない。



第1図 妻木晩田遺跡出土破鏡

この破鏡が出土したSI45は、松尾頭3区北端近くの丘陵頂部からやや下がった緩斜面に立地し、大型庇付掘立柱建物の約40m北東に位置する。床面積33.9㎡の大型の住居跡である。この住居跡は十数回の建て替えを経ており、破鏡は貼床下から出土した。厳密な意味で破鏡と共伴した土器は示されていないが、この住居が最終的に埋没したのは弥生時代後期後葉であり、破鏡の廃棄ないし埋置もこれに近い時期が想定されている。

この破片から鏡式を判断するうえで、手がかりとなる属性は①外区が素文平縁、内区外周が直で粗い櫛歯文帯であること、②面径（復元径）が約10cmであること、の2点にすぎない。鏡式について、第1次発掘調査の報告書（松本他編 2000）では内行花文鏡、その後の出版物（高尾・馬路編 2003）では飛禽鏡とされている。

飛禽鏡は漢鏡7期第1段階に位置づけられ、縁の形態には斜縁のものと同素文平縁のものがある。後者は内区外周に櫛歯文帯をもつことから上記①の属性を満たす。日本列島での出土例（第1表）をみると、斜縁のものを含まずすべてが弥生時代終末期以降の墳墓からの出土である。また、面径の判明している例はすべて径10cm未満である。

飛禽鏡と同じく7期第1段階に位置づけられる上方作系浮彫式獸帯鏡にも上記①、②の属性をもつものがあるが（岡村 1992）、列島出土例のうち、出土遺構が明らかかなものはすべて弥生時代終末期以降の墳墓から出土している（第2表）。

内行花文鏡においては、櫛歯文は内区外周の雲雷文を構成する単位文様である。岡村分類（岡村 1993）によれば、雲雷文をもつのは四葉座式および円座Ⅰ、Ⅱ式である。ただし櫛歯文が傾斜するか直となるかは分類の厳密な基準とはなっておらず、傾斜した細かい櫛歯文から直な粗い櫛歯文への変化が想定されているにとどまる。四葉座式のうち「直な粗い櫛歯文」となる傾向があるのはⅢ、Ⅳ式である。ただし四葉座Ⅲ、Ⅳ式の面径は10.0cm以上となるものが多く、属性②を満たす可能性は少ない。一方で円座Ⅰ、Ⅱ式はともに「直な粗い櫛歯文」となる傾向があり、面径も10cm前後にまとまっている。したがって松尾頭例が内行花文鏡であるならば円座Ⅰ、Ⅱ式となる可能性が高い。編年的には漢鏡5期に位置づけられる。

以上、鏡式について検討したが、仮に松尾頭例を飛禽鏡もしくは浮彫式獸帯鏡とすると、列島最古の出土例、かつ

竪穴住居からの唯一の出土例というかなり特殊な状況を想定しなければならなくなる。その点、漢鏡5期の内行花文鏡ならば、出土遺構の時期（弥生時代後期後葉）とは整合的である。したがって、確言はできないものの内行花文鏡である可能性の方が高いものと考えておきたい。

(2) 松尾城地区 第11 竪穴住居跡 (SI11) 出土鈕片

鈕はほぼ完存し、鈕孔は半円形である。鈕座の四葉文が一葉のみ遺存している。四葉文の縁に沿って割られていることから、この四葉文が意図的に遺された可能性も考えられる。四葉文の一部および四葉文の反対側の破断面が研磨されている。また、鈕の基部を中心に赤色顔料が付着している。鈕の直径は約2cm、四葉文の幅は約1.5cmである。四葉文がやや宝珠形に近いことから、漢鏡6期の四葉座内行花文鏡V A式もしくはV B式（岡村1993）の鈕である可能性が高いと考えられる。この破鏡が出土したSI11は、松尾城地区南東の丘陵頂部から北側へくだった斜面地に立地する。平面形は隅丸方形を呈し床面積は21.4㎡である。出土位置は北側（谷側）周壁溝際の床面上である。住居廃絶の時期は後期後葉と考えられる。

(3) 妻木山地区 第119 竪穴住居跡 (SI119) 出土鏡

径約8cm。鈕を含め全体の約2/3程度が遺存している。欠損した状態で検出されたが、本来完形であったのかどうかは不明である。風化が著しく内区の文様は不明であるが、外区は幅1.5cm程度の平縁のようである。SI119は妻木山地区の最高所を占める丘陵頂部平坦面から北西側にやや下る緩斜面に位置する。平面形は隅丸方形を呈し推定床面積は19.8㎡。床面で焼土面が検出されており、鍛冶炉の可能性が指摘されている（高尾2003）。鏡は支柱穴際の床面直上から鏡背面を上にした状態で出土した。住居の廃絶時期は後期後葉と考えられる。

2. 中四国地方における破鏡の様相

以上、妻木晩田遺跡出土の青銅鏡について整理した。妻木山地区出土鏡については遺存状態が悪く多くの情報を引き出せないが、松尾頭地区、松尾城地区の破鏡については他遺跡出土例との比較検討が可能である。破鏡の出現、終焉の過程やその機能、性格については既に多くの先学が論じている。高倉洋彰は、北部九州における破鏡の分布は仿製鏡と同様に甕棺墓分布域の周縁地域を

中心とすることから、流入量の減少した舶載鏡の不足を補う目的で完形鏡を分割し、平野を単位とした各地域間相互の結合の象徴として甕棺墓分布域から周縁地域に分配されたとみる（高倉1976）。岡村秀典は分割の背景に鏡所有層の拡大という内的要因を想定する（岡村1990）。一方で、これまでに出土した破鏡の中に接合例がないことから分割、配布を疑問とし、鏡の破砕副葬を破鏡出現の契機とする説もある（藤丸1993）。また、出土遺構の分析から、破鏡および仿製鏡と舶載完形鏡との間に、後者を上位とする階層性が存在したとする見方が主流である（正岡1979、下條1983、武末1990等）。ただし、これら先行研究の多くは、破鏡の分布が集中する九州地方での様相を中心に論じられたものであり、中四国地方の地域性については必ずしも十分に検討されていない。そこで、次に中四国地方の破鏡の様相を概観し（第3表、第2図）、その特徴をまとめてみよう⁽¹⁾。

鏡式をみると、5、6期の内行花文鏡が大部分を占める。編年的に最も古い鏡は八禽鏡、異体字銘帯鏡など漢鏡4期（前漢末）の鏡である。7期の鏡としては、松尾頭例を別にすれば飛禽鏡、獣帯鏡、画文帯神獸鏡があるが、いずれも古墳副葬例である。鏡式についてのこれらの様相は、おおむね北部九州の状況とも一致する（藤丸1993、岡村1999）が、分布や出土状況については、中四国地方の地域性ともいべきいくつかの特徴を指摘できる。

第一に、鳥取県域、松山平野、高知平野といった特定の地域、その中でも特定の集落に分布が集中する傾向がある。複数の鏡が出土した妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡、文京遺跡、田村遺跡群は集住度が突出して高い集落、あるいは交易の拠点と目される遺跡である。破鏡の希少性と、それを入手し得た集団の優位性を認めることができよう。

第二に、墳墓への副葬例が極めて少なく、集落域からの出土例が卓越する。こうした状況は、九州における大分県大野川流域や熊本県域の様相と類似する⁽²⁾。大分県出土例について検討した高橋徹は、当該地域の破鏡の性格について「より共同体に帰属するものとして取り扱われた祭祀品」と考える（高橋1979）。中四国地方の例についても同様に、特定個人に帰属する「威信財」ではなく、共同体的性格の強い祭器と考えられよう。

第三に、後期中葉、後期後葉など比較的早い時期に廃棄、遺棄された例が認められる。全国の出土例を検討した西川寿勝によれば、破鏡が出土した遺構の時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に7割以上が集中する。そして、破鏡の廃棄、副葬の契機として、当該期における舶載完形鏡の流入を想定している(西川1996)。高橋徹は、大分県域での住居への廃棄が後期後葉から始まることを示し、共同体に残る弥生時代の伝統的な価値観の否定と評価する(高橋前掲)。

これらの議論は、破鏡の廃棄、副葬の背景に、弥生時代から古墳時代への大きな社会的変革を想定するものである。しかし、文京遺跡例や高知平野の例など後期中葉以前の出土例については、これとは異なる説明が必要となろう。

3. 鳥取県域における破鏡の出土状況について

以上、中四国地方の破鏡の特徴として、分布が特定の地域に集中すること、集落出土例が卓越すること、弥生時代後期の早い段階から破鏡の廃棄が始まることを確認した。この中で、後二者が示すような破鏡の出土遺構・出土状況と廃棄時期は、破鏡の性格を考えるうえでの重要な手がかりとなる。そこで、妻木晩田遺跡における破鏡の出土状況について改めて検討しよう。妻木山地区の鏡を含めた3例の鏡は、いずれも竪穴住居の床面上からの出土である。その中で松尾頭 SI45 例は、先述のとおり貼床下から出土したものであり、単なる廃棄ではなく住居の建て替えに際して埋置されたとも考えられる出土状況である。廃棄の時期はいずれも後期後葉であり、集落の最盛期にあたる。また、鏡が出土した3軒の住居は、いずれも各丘陵の最高所からややくだった斜面地に立地する⁽³⁾。

住居跡の床面上からの出土例として、鳥取県内では他に青木遺跡例、南谷大山遺跡例があげられる。八禽鏡片が出土した青木遺跡 HSI60 は丘陵平坦面に位置する。この丘陵は集落の最も西側にあたり、古墳時代には墓域に転換する。HSI60 は床面積 47.2m²を測る丘陵上最大規模の住居である。仿製重圈文鏡が出土した南谷大山遺跡 B 区 SI23 は丘陵斜面地に立地する。遺存状況が悪く住居の規模は明らかにできないが、当該期の遺構分布範囲の中心近くに位置し、2軒の大型住居がこの住居から等間

隔に位置することが指摘されている(牧本1994)。

以上、妻木晩田遺跡例を含めた鳥取県域の出土例を見ると、床面上、あるいは貼床下から出土している点から、無造作に廃棄されたとは考えにくい状況である。また、妻木晩田遺跡松尾頭例、青木遺跡例のように集落内の平均的な床面積を上回る大型住居からの出土例があることに加え、高所の志向、あるいは大型住居との位置関係などの点において、破鏡を廃棄する住居への意図的な選択が働いていたことが想定される。

以上のことから、これらの出土状況は単なる廃棄ではなく、破鏡を用いた儀礼と密接な関係にあること、さらに想像を逞しくすれば、儀礼に伴って住居内に埋置された結果である可能性が考えられるのではないだろうか。すなわち、希少価値や祭器としての性格を失ったために廃棄されたのではなく、祭器としての性格ゆえに集落内の特別な地区や施設に埋置されたとの解釈である。もちろん、鳥取県域の事例から導いた解釈を中四国地方全体に直ちに敷衍することはできず、溝などに廃棄された例や包含層出土例などについても検討しなければならないが、鳥取県域における破鏡を用いた儀礼の具体的なあり方として指摘しておきたい。

まとめ

以上、妻木晩田遺跡出土の鏡について情報を整理したうえで、中四国地方における破鏡の様相を概観し、当地方では少数の有力な集団によって破鏡が集中的に保有された状況を確認した。また破鏡の性格について、集団によって所有、管理された祭器と考え、妻木晩田遺跡を含む鳥取県域では儀礼に伴って住居内に埋置、遺棄された可能性を示した。

以上の検討を踏まえれば、妻木晩田遺跡の「首長層の居住域」と評価されることの多かった松尾頭地区について、「儀礼空間」として捉える視点も必要であろう。もちろん、貴重な祭器を用いた集落内の儀礼は首長によって執行された可能性が高いであろうから⁽⁴⁾、このことが松尾頭地区における首長層の居住を否定するものではない。ただし、鏡、破鏡の所有が松尾頭地区のみに限られず、松尾城地区や妻木山地区でも同様の儀礼がおこなわれていた点にも留意しなければならない。松尾頭地区の評価は、破鏡のみならず大型掘立柱建物や生産遺構な

どの検討を総合しておこなわれねばならないことは言うまでもない。

他にも論じ残した問題は多いが、引き続き検討を進めていこうと考える。(君嶋 俊行)

【註】

- (1) 集成には以下の文献を参考にした。(国立歴史民俗博物館編 1994)、(埋蔵文化財研究会編 1994)、(西川 1996)、(高橋 2003)、(辻田 2001、2005)。穿孔や研磨のなされていないものは「鏡片」として区別する見解もあるが、本稿では「破鏡」で統一した。なお、完形鏡を破砕して副葬する「破砕鏡」「打ち割鏡」は今回の検討の対象外とした。
- (2) 大分県域で集落出土例が卓越する状況については、これを瀬戸内地域からの影響とみる説もある(九州古文化研究会編 2000)。
- (3) 妻木晩田遺跡では、丘陵の頂部は住居等につくられない空閑地となることが多い。
- (4) 大分県の破鏡出土住居の規模を分析した高橋徹は「中型の中でも比較的規模の大きい一群から出土する」というデータを示し(高橋 1979)、「大きな堅穴の住人」が破鏡を管理していた可能性を指摘している(九州古文化研究会編 2000)。

【引用・参考文献】

- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の様式と編年」『史林』67-5、史学研究会
- 岡村秀典 1990 「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』都出比呂志・山本三郎編、木耳社
- 岡村秀典 1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』出雲考古学研究会
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55、国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 1999 「三角縁神獣鏡の時代」吉川弘文館
- 九州古文化研究会編 2000 「古墳出現期前後の社会像」九州古文化研究会
- 国立歴史民俗博物館編 1994 「日本出土鏡データ集成 2」『国立歴史民俗博物館研究報告』56、国立歴史民俗博物館
- 下條信行 1983 「北九州」『三世紀の考古学』森浩一編、学生社
- 高尾浩司 2003 「妻木晩田遺跡における鉄器生産の一試論」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
- 高尾浩司・馬路晃祥編 2003 「甞る弥生の国邑 妻木晩田遺跡」鳥

取県教育委員会

- 高倉洋彰 1976 「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2、九州歴史資料館
- 高橋敏 2003 「最北の破鏡—鏡片分布からみた古墳出現期の動態(予察)」『研究紀要』創刊号、(財)山形県埋蔵文化財センター
- 高橋徹 1979 「廃棄された鏡片」『古文化談叢』6、九州古文化研究会
- 武末純一 1990 「墓の青銅器、マツリの青銅器—弥生時代北九州例の形式化—」『古文化談叢』22、九州古文化研究会
- 辻田淳一郎 2001 「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』46、九州古文化研究会
- 辻田淳一郎 2005 「破鏡の伝世と副葬」『史淵』142、九州大学大学院人文科学研究院
- 正岡睦夫 1979 「鏡片副葬について」『古代学研究』90、古代学研究会
- 西川寿勝 1996 「弥生時代終末の対外交流—破鏡の終焉をめぐって—」『卑弥呼をうつつした鏡』西川寿勝著、北九州中国書店
- 藤丸詔八郎 1993 「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心に—」『古文化談叢』30、九州古文化研究会
- 埋蔵文化財研究会編 1994 「倭人と鏡」埋蔵文化財研究会
- 牧本哲雄 1994 「第 5 章 第 5 節 南谷大山遺跡の変遷・性格と集団の動向」『南谷大山遺跡Ⅱ 南谷 29 号墳』牧本哲雄編、鳥取県教育文化財団
- 松本哲他編 2000 「妻木晩田遺跡発掘調査報告」大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会

本稿をなすにあたって、藤丸詔八郎氏、高田健一氏、森本幹彦氏より御教示、御助力をいただいた。末筆ながら記して謝意を表する次第である。

第1表 日本列島出土飛禽鏡一覽表

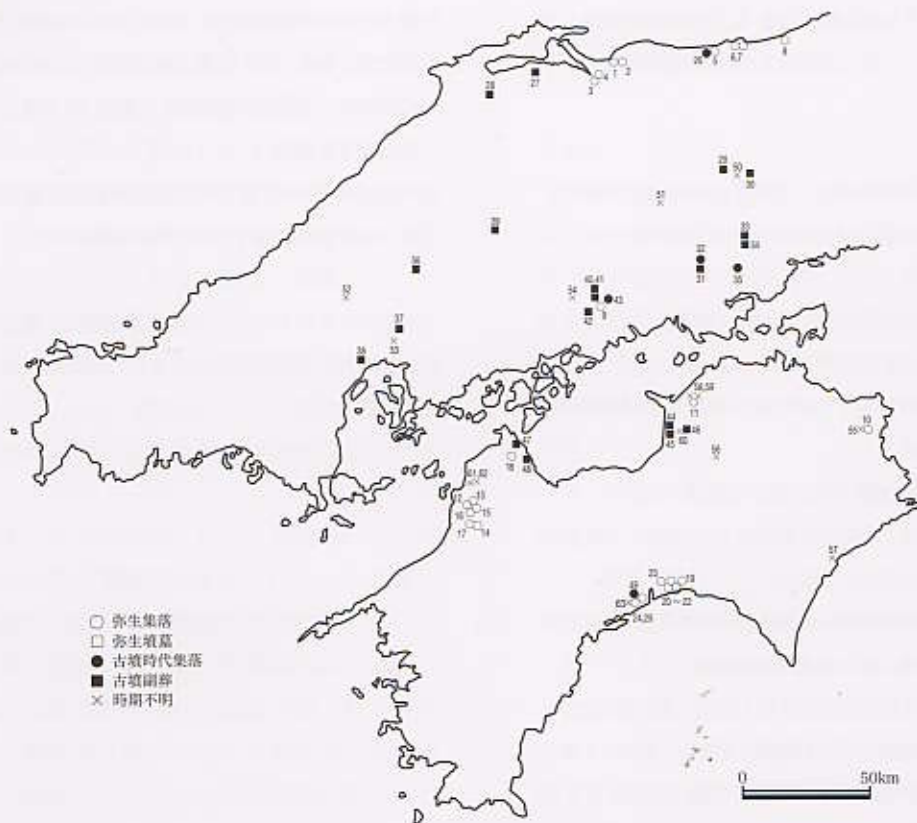
No.	出土遺跡・遺構	所在地	出土遺構の時期	縁の形態	面径	状態
1	伝 稲荷山第1号墳	神奈川県厚木市	古墳時代前期	—	6.0cm	完形
2	岩津1号墳	愛知県岡崎市	古墳時代後期	平縁	8.3cm	完形
3	岩内山遺跡D区1号土壇墓	福井県武生市	弥生終末期	斜縁	9.1cm	破碎
4	成山2号墳	京都府綾部市	古墳時代前期	平縁	9.5cm	完形
5	上大谷15号墳	京都府城陽市	古墳時代前期後半?	斜縁	9.6cm	完形
6	若水A11号墳	兵庫県山東町	弥生終末期	斜縁	約9cm	完形
7	篠田6号墳	鳥取県鳥取市	古墳前期後葉	斜縁	9.3cm	完形
8	三輪宮山墳丘墓	岡山県総社市	弥生終末期	平縁	9.7cm	完形
9	石鎚権現5号墳	広島県福山市	古墳時代前期	不明	不明	破鏡
10	汐井掛遺跡28号木棺	福岡県若宮町	弥生後期～終末期	斜縁	※8.0cm	破鏡
11	外之隈遺跡II区2号箱式石棺	福岡県朝倉町	弥生終末期	斜縁	9.0cm	完形
12	高森1号墓	大分県宇佐市	弥生終末期	斜縁	9.5cm	完形

※復元径

第2表 素文平縁・櫛歯文をもつ上方作系浮彫式獸帯鏡一覽表 (日本列島出土)

No.	出土遺跡	所在地	出土遺構の時期	作鏡者	形式	面径
1	矢場薬師塚古墳	群馬県太田市	古墳時代前期	上方作	四像式	10.9cm
2	養久山1号墓	兵庫県掛保川町	弥生終末期	—	四像式	9.1cm
3	節匂山2号墳	徳島県徳島市	古墳時代前期	—	四像式	10.7cm
4	熊本山古墳	佐賀県佐賀市	古墳時代前期	—	四像式	10.8cm

※ (岡村 1992) を基に作表。3, 4 は踏み返し鏡の可能性有り (西川 1996)。



第2図 中四国地方の破鏡出土分布図 ※番号は第3表のNo.と一致する

第3表 中四国地方の破鏡出土地名表

No.	県名	所在地	遺跡名	遺構名	遺構の時期	鏡式
弥生時代出土例						
1	鳥取県	米子市・西伯郡大山町	妻木晩田遺跡 松尾頭地区	竪穴住居 SI45	後期後葉	内行花文鏡?
2		米子市・西伯郡大山町	妻木晩田遺跡 松尾頭地区	竪穴住居 SI11	後期後葉	内行花文鏡
3		米子市	青木遺跡 H地区	竪穴住居 HSI60	後期後葉	八禽鏡
4		米子市	福市遺跡 吉塚地区	竪穴住居 Y-31	終末	不明
5		東伯郡湯梨浜町	南谷大山遺跡 B区	竪穴住居 SI23	後期後葉	仿製重圓文鏡
6		鳥取市	青谷上寺地遺跡	包含層	後期後半～前期初頭	仿製重圓文鏡
7		鳥取市	青谷上寺地遺跡	包含層	後期後半～前期初頭	内行花文鏡
8		鳥取市	秋里遺跡 西笹竹地区	溝 SD9	後期	内行花文鏡
9	広島県	深安郡神辺町	龜山遺跡	溝 SD5001	後期～古墳時代	不明
10	徳島県	徳島市	庄・蔵本遺跡	遺構外	弥生終末	異体字銘帯鏡
11	香川県	善通寺市	鏡ノ宗	竪穴住居跡	終末	仿製内行花文鏡
12	愛媛県	松山市	文京遺跡 第10次調査	包含層	中期末～後期前葉	不明
13		松山市	文京遺跡 第24次調査	包含層	後期末	斜縁鏡
14		松山市	土壇原IV遺跡	38号土坑墓	後期後半	仿製方格孔文鏡
15		松山市	東本遺跡 第4次調査	住居 SB302	後期末	方格規矩鏡?
16		松山市	釜の口遺跡 第8次調査	溝 SD 3	後期末～古墳時代初頭	不明
17		伊予郡砥部町	水満田遺跡 7次調査	包含層	後期後半～古墳時代前期	内行花文鏡?
18		今治市	高橋湯ノ窟遺跡	包含層	後期末～古墳時代初頭	方格規矩鏡?
19	高知県	香美郡春野町	北地遺跡	竪穴住居	後期中葉	内行花文鏡?
20		南国市	田村遺跡群 Loc.45 (田中地区)	竪穴住居 ST1	後期末	方格規矩四神鏡
21		南国市	田村遺跡群 Loc.34B (横手地区)	水溜状遺構 SP1	後期後半	方格規矩四神鏡
22		南国市	田村遺跡 E 1区	竪穴住居 ST102	後期中葉	内行花文鏡?
23		高知市	介良遺跡	溝 SD1	後期	内行花文鏡
24		吾川郡春野町	西分増井遺跡 I A区	包含層	後期	内行花文鏡?
25		吾川郡春野町	西分増井遺跡 I A区	土器集中区	後期中葉	不明
古墳時代出土例						
26	鳥取県	東伯郡湯梨浜町	長瀬高浜遺跡	E2・E3土器群	古墳時代前期	内行花文鏡
27	鳥根県	八東郡八雲村	小屋谷3号墳	第1主体部	古墳時代前期	龍文鏡
28		雲南市	土井・砂1号墳	第2主体部(木棺直葬)	古墳時代前期	内行花文鏡
29	岡山県	苫田郡鏡野町	竹田妙見山古墳	不明	古墳時代前期	内行花文鏡
30		津山市	正仙塚古墳	長持形石棺	古墳時代前期	面文帯神獸鏡
31		岡山市	津寺4号墳	木棺	古墳時代前期	内行花文鏡
32		岡山市	津寺遺跡	竪穴住居 218	古墳時代前期	内行花文鏡
33		赤磐市赤坂町	森古墳	箱式石棺	古墳時代前期	不明
34		赤磐市山陽町	桜山2号墳	木棺	古墳時代	不明
35		岡山市	百間川兼基遺跡	包含層	古墳時代	仿製鏡?
36	広島県	山県郡北広島町	中出勝負峠8号墳	埴塚土坑 SK8-4	古墳時代前期初頭	内行花文鏡
37		広島市	神宮山第1号古墳	竪穴式石槨(B石室)	古墳時代前期後半	内行花文鏡
38		広島市	月見城第2号古墳	a主体(木棺)	古墳時代中期	内行花文鏡
39		三次市	四拾貫第9号古墳	A主体(粘土槨)		獸帯鏡
40		福山市	石籠山第2号古墳	第1主体(土墳)	古墳時代前期	内行花文鏡
41		福山市	石籠山第2号古墳	第1主体(土墳)	古墳時代前期	不明
42		福山市	石籠山第5号古墳	埴塚土坑 SK14	古墳時代前期後半	飛鳥鏡
43		深安郡神辺町	神辺御領遺跡	溝 SD09	古墳時代前期初頭	獸帯鏡
44	香川県	観音寺市	鹿隈古墳群		古墳時代前期	方格規矩鏡
45		観音寺市	鹿隈獅子塚古墳		古墳時代前期	不明
46		三豊市山本町	知行寺山古墳	竪穴式石槨	古墳時代	不明
47	愛媛県	今治市	稻の谷9号墓	箱式石棺	終末～古墳時代前期	獸帯鏡
48		今治市	雉之尾2号墳	箱式石棺	古墳時代前期	内行花文鏡?
49	高知県	吾川郡春野町	西分増井遺跡	竪穴住居 ST 5	古墳時代初頭	不明
古代以降・時期不明						
50	岡山県	津山市	下道山遺跡	表探	弥生後期?	異体字銘帯鏡
51		真庭市北房町	桃山遺跡 2区	包含層(攪乱層)		不明
52	広島県	山県郡安芸太田町	釜谷谷遺跡			内行花文鏡
53		広島市	池の内遺跡			内行花文鏡
54		府中市	備後国府跡 砂山地区	溝	古墳時代～中世	方格規矩鏡
55	徳島県	徳島市	庄遺跡	攪乱土		獸帯鏡?
56		三好郡三好町	松岡遺跡 正力地区	表探		内行花文鏡
57		海部郡海部町	寺山1号墳	表土中		内行花文鏡
58	香川県	善通寺市	福木遺跡	包含層	白鳳時代	方格規矩四神鏡?
59		善通寺市	福木遺跡	包含層	白鳳時代	内行花文鏡
60		観音寺市	一の谷遺跡群	包含層	古墳時代以降	不明
61	愛媛県	松山市(旧北条市)	大相院遺跡	自然流路 SR-001		重圓鏡
62		松山市(旧北条市)	大相院遺跡	中世の層		斜縁鏡
63	高知県	吾川郡春野町	馬場末遺跡 II B区	溝 SD 1	古代	内行花文鏡?

妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2005

発行日 2006年3月

編集 鳥取県教育委員会事務局 妻木晩田遺跡事務所
〒689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木 1115-4
電話 (0859) 37-4000

発行 鳥取県教育委員会

印刷 (有)タクミコーポレーション